

「台風情報の表示方法等に関する懇談会」(第1回)の議事概要について

平成17年12月21日

気象庁

1. 懇談会の概要

日時：平成17年12月14日(水) 10:00～12:00

場所：気象庁大会議室(5階)

出席者：廣井座長、石橋、磯澤、高橋、宮崎、細川、生駒(代理 竹田)、小暮、
金谷(代理 杉原)、宮本 の各委員(敬称略)
平木予報部長、瀬上業務課長

2. 議事概要

(1) 懇談項目

- 1) 台風予報の図表示方法
- 2) 温帯低気圧に変わった台風に関する情報の発表方法
- 3) その他

(2) 懇談項目に沿って、事務局から資料の説明がなされた後、討議が行われ、各委員から以下のような意見が出された。

(台風情報の表示について)

台風情報の表示については、サプライサイドが一元的に決めるのではなく、いろいろな方法があってデマンドサイドが選択できるようにすることが大事である。

命に係る情報は単純で一元的な情報がよい。台風情報は、天気予報と異なって命に関わる情報であるため、大衆に対して情報を伝える場合には、表示方法はある程度統一しないと混乱になる。

慣れ親しんだこれまでの表示方法を変えると、理解し難くなるため、新しい情報を国民一般に伝える場合には慣れさせるための期間が必要である。

(台風予報の中心点・中心線の表示について)

台風予報の中心点・中心線を表示することについては、中心点がついた場所の近辺の住民に緊張感を高められるという意見と、中心点を表示するし

ないは重視する必要はなく、従来どおりでよいとする意見など様々。

(「暴風域に入る確率」の面的情報について)

「暴風域に入る確率」の面的情報は、行政機関のような専門的ユーザーにとっては防災対応の判断の助けになる細かな情報として利用できるが、国民一般が利用するにはある程度慣れる期間が必要である。

予報の精度が向上することは喜ばしいが、予報が細くなるがゆえに伝えきれないこともあり、「暴風域に入る確率」の面的情報が果たしてわかりやすいものとして伝わるかどうか疑問である。

導入当初は、従来の暴風警戒域の図を用いて台風の動きを説明してから、付加的な情報として「暴風域に入る確率」の面的情報を利用するというような使い方になるのではないか。

(その他)

住民が知りたいことは、いつ頃からいつ頃まで雨や風の影響があるかである。何が起きそうで、何をしなければいけないかという具体的に危険性を理解できるような情報が必要。

台風による災害は風だけではないため、警戒すべきは雨なのか、風なのかかわかる情報が必要である。

南の方で発生した台風についてもっと早くから台風情報を出して欲しい。

防災関係者としては、3日より先の予報などが必要である。

防災関係者としては、“人員をどのように配置して住民を守るか”ということの判断に役立つので、きめ細かな情報をできるだけ多く出して欲しい。

霞ヶ関の省庁も含めて、色々なユーザーの意見も聞いて検討して欲しい。

(3) 次回の懇談会について

今回の意見及び利用者への意見聴取の結果を踏まえて懇談を行う。